

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 18 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520119

研究課題名（和文） デイヴィッド・チューダーの演奏実践とその思想

研究課題名（英文） David Tudor's Performance Praxis and Its Philosophy

研究代表者

澁谷 政子（SHIBUYA MASAKO）

福井大学・教育地域科学部・准教授

研究者番号：90262253

研究成果の概要（和文）：アメリカのピアニスト・作曲家デイヴィッド・チューダー（1926～96）の音楽活動の実態を把握するため、ゲッティ研究所図書館所蔵「David Tudor Papers」等の資料調査をおこなった。楽譜、演奏のためのメモ、演奏会プログラム、書簡等の情報を集約し、チューダー研究の基盤となるデータベースを構築した。これまでに演奏レパートリーの分析、チューダー書簡の読解の結果を論文として公表した。今後も資料の分析と考察をすすめる。

研究成果の概要（英文）：This research aims at figuring out the music activities of David Tudor (1926-29), an American pianist and composer, through consulting primary documents including the David Tudor Papers in the Getty Research Institute Library, Los Angeles. Various data and information, picked up from scores, notes for performances, concert programs, and letters, are compiled into a database, which is to provide a foundation for Tudor study. The results of analysis of the repertoire and documentation of letters written by Tudor have been published already. The investigation of the documents is still in progress.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術学、芸術史、芸術一般

キーワード：音楽学、前衛音楽、実験音楽

1. 研究開始当初の背景

アメリカ実験音楽は、ヨーロッパの伝統的な音楽の枠組みを脱し、音楽芸術の新たな可能性を開拓しようとする試みであった。西洋近代の音楽文化の伝統においては、芸術音楽は、作曲家の意図のもとに音を構成するとい

う「作品」概念、音により外音楽的対象を表現するという「表象」概念、また、音のみによる自立的世界を重視する「絶対音楽」概念を醸成し、またそれらを規範化してきた。これに対し、ダダやシュールレアリスムによる芸術概念の問い直しをバックボーンとし、象徴的表現主義、モダンダンス、東洋思想、電

子音響テクノロジー等と連携しつつ、伝統的な音楽芸術概念からの跳躍をはかったのが、アメリカ実験音楽である。その活動については、カリスマ的存在である作曲家ジョン・ケージを中心に語られてきた。そして、とくに彼らの音楽の実践について語られる際に必ず言及されてきたのが、デイヴィッド・チューダーの存在である。チューダーは、現代音楽の卓越したリアリゼーション能力をもったピアニスト、ケージらの良き協力者として位置づけられてきた。

ケージらの音楽の最大の特徴は、図形楽譜等による不確定性や偶然性を原理とする音楽実践である。こうした特性を考慮すれば、チューダーの役割は、従来、演奏家に割り当てられてきたものよりむしろはるかに大きい。彼は、作曲家が詳細に規定した響きを再現するのではなく、作曲家が示した理念的枠組を用い、自ら音を選び出し、具体的な音響を生み出していった。したがって、実際に鳴り響く音現象を作品ととらえるならば、それは作曲家とチューダーの共作であると考えるのが妥当であろう。

しかし、アメリカ実験音楽の研究において、チューダーの名自体は頻りに挙げられているものの、彼と作曲家たちとの関係や、彼自身が何を考え、どのような音楽観にそって音を生み出していったのか、といったチューダーの演奏活動の実態と思想は、ほとんど明らかにされていない。西洋近代の「作品」概念にとらわれない音楽活動を展開したアメリカ実験音楽の実態を把握するためには、作曲家のみならず、そのパフォーマンスの実現に大きく関与したチューダーについて研究をすすめることが重要な課題である。

デイヴィッド・チューダーに関する主な先行研究としては、J. Holzapfel, *David Tudor and the Performance of American Experimental Music, 1950-59*. (Ph. D. diss., CUNY, New York, 1994)、1997年のMusikText誌の特集、2001年のロサンゼルス・ゲッティ研究所主催「デイヴィッド・チューダー・シンポジウム」の記録、A. C. Beal, *New Music, New Allies*. (Duke University Press, 2006)、M. Rogalsky, *Idea and Community: The Growth of David Tudor's Rainforest, 1965-2006*. (Ph. D. diss., City University, 2006) 等がある。アメリカ実験音楽研究全体から見れば、チューダー研究はまだ手薄な状況と言える。

2. 研究の目的

本研究は、アメリカ実験音楽および前衛音楽の展開において重要な役割を果たしたデイヴィッド・チューダー(1926~96)の音楽

活動を、資料調査によって実証的に跡づけ、その全体像を把握し、そこから彼の演奏実践の実態とそれを支える思想を明らかにすることを目的とする。チューダーの活動については、欧米の実験音楽および前衛音楽の作曲家に関する研究のなかで、付帯的に記述されているのが現状であるので、それらの情報を集約するとともに、一次資料の調査から具体的情報を収集・整理することによって、チューダー研究の基盤を構築する。

3. 研究の方法

(1) 一次資料の収集

チューダーの活動は、これまで主にケージら作曲家の活動にどのように貢献したかという視点から記述されてきた。本研究では、チューダー本人を中心に据えてその音楽活動の実態を客観的に捉えることが第一の課題である。したがって、チューダーの音楽活動や生活等の足跡を、ひとつひとつ具体的な資料から跡づけることが必要であり、一次資料の調査という方法が最も基礎的作業となる。今回の研究で調査対象としたのは以下の資料である。

①ロサンゼルス・ゲッティ研究所図書館所蔵資料

・David Tudor Papers

チューダーが遺した膨大な資料からなるコレクション。今回は、チューダーが所持していたピアノ曲等の楽譜と演奏のためのメモやチューダーが作成した演奏譜(Series I)、各種プロジェクトに関するメモ(Series II)、チューダー宛の書簡(Series IV)、演奏会プログラム(Series VI A)、演奏に関する契約書、音楽以外の関心事(東洋思想、占星術、シュタイナー、ゲイトヒル協同組合)に関するメモ(Series VI B)を調査した。

・Mary Caroline Richards Papers

チューダーのパートナーであったリチャーズに宛てられた、チューダーの書簡(box 26)を中心に調査した。

②シカゴのノースウェスタン大学図書館所蔵資料

・John Cage Collection

ケージとチューダー宛の書簡(Series I: Correspondence)、ケージ宛のチューダーの書簡(Series II: Box 13, File 7)を調査した。

③バーゼルのパウル・ザッハー財団資料室の所蔵資料

・Stefan Wolpe: music manuscripts

《Battle Piece》(1943-47)手稿譜(box 9)を閲覧した。チューダーが作曲を師事したス

テファン・ヴォルペが、チューダーにスケッチを見せながら作曲をすすめたとされる作品。

・Correspondences

S. Wolpe, H. Pousseur, L. Berio 宛のチューダーの書簡を閲覧。

④ ニューヨーク・タイムズ紙

ニューヨーク・タイムズのデータベースを利用して、チューダーやケージに関する記事を検索収集。

(2) 二次資料の収集

ニューヨーク楽派の活動に関する論文、研究書を収集し、そこからチューダーに関わる事項をピックアップした。Misch, Imke & Markus Bandur (eds., 2001), Karlheinz Stockhausen bei den Internationalen Ferienkursen für Musik in Darmstadt 1951-1996. には、ゲッティの資料には含まれていないチューダーの書簡が収録されている。刊行されているチューダー自身の著述やインタビューはきわめて少数であるが、ウェブ上にはいくつかチューダーへのインタビューや、協同して作品制作にかかわった人物による回想などが公表されている。また、チューダーによる演奏や、チューダーの電子音楽作品のCDも収集した。

(3) データベースの構築

チューダーの音楽活動とそれを取りまくさまざまな事項を俯瞰するために、上記(1)(2)の情報をデータベース化した。(1)のうち、ゲッティ研究所図書館の資料の大半はデジタルカメラで撮影し、PDF化してリンクさせた。(ただし、撮影は個人研究の目的に限って許可されたものであるため、画像を公開することはできない。)

4. 研究成果

(1) データベース

収集した情報をデータベース化した結果、現在、約3000件の情報を登録完了している。細目、年月日、キーワード、資料出典等でソート、検索が可能である。現時点での細目とその件数を以下に示す。

「ピアノ演奏」	313
「ダンス音楽」	547
「パフォーマンス」	160
「作曲・プロジェクト」	252
「録音」	73
「セミナー・レクチャー」	37

「学習」	52
「演奏法」	183
「音楽観」	19
「インタビュー」	8
「書簡 (チューダー宛を含む)」	731
「生涯」	35
「ニューヨーク楽派」	69
「芸術一般」	150
「チューダー研究」	143
「その他」	252

このデータベースの構築によって、これまで個々の点として存在していたチューダーに関する情報を総体的に把握することが可能になった。まだすべての資料の分析は完了していないため、データベースを利用しながら、演奏法とそれを支える思想について引き続き考察をすすめる予定である。本報告では、すでに公表した研究結果の概要を述べる。

(2) チューダーの音楽活動

チューダーの生涯にわたる音楽活動については、以下の4期に分けてとらえることができるだろう。

第1期(～1950)：フィラデルフィアのオルガニストから、ニューヨークでのピアニストとしてのデビューまで。1950年12月7日、カーネギーホールでのブレーズのピアノ・ソナタ第2番のアメリカ初演が次期への重要な橋渡しとなる。

第2期(1951～1965)：ケージらとともにニューヨークの実験音楽シーンを牽引するとともに、ダルムシュタット現代音楽夏期講習会へ参加し、ヨーロッパの前衛作曲家たちと交流。この時期のチューダーのピアニストとしての活動が最も有名である。

第3期(1966～1970)：電子音響作家への移行期。なかでも重要な出来事は、ベル電話研究所と芸術家たちとの協同作業によるイベント「9イブニングズ」(1966年10月)における自作《バンドネオン!》の発表、マース・カニングハム舞踏団のための《レインフォレスト》(1968)作曲、そして1970年の大阪万博「ペプシ館」の音響デザイン担当である。

第4期(1971～1996)：晩年はもっぱらライブ・エレクトロニクスやサウンド・インスタレーション作曲家として活動する。カニングハム舞踏団に音楽を提供する傍ら、ローウェル・クロス、ジョン・ドリスコル、ビル・ヴィオラ、ジャッキー・モニエらとの協同作業を軸に活動を展開した。

先行研究において、Holzaepfelはチューダーが手がけた初演曲を160曲以上特定してい

るが、David Tudor Papers の「Series VI A: Programs, 1938-1996」の調査でも、チューダーが生涯に演奏家として手がけた作品はきわめて多数にのぼり、とりわけ、常に新しい作品にとりくむ姿勢が顕著であることを跡づけるが確認できた。(澁谷 2009) の付録に示した表は、チューダーの完全な演奏記録とはまだ言えず若干修正の余地があるが、ダンス公演やレコーディングを除く演奏およびパフォーマンス活動のおおよその全体像を示している。手がけた作曲家は自身を除いて 125 名。そのうち 81 名は 1～2 回のみの演奏であり、この表で演奏回数が 10 回を超えるのは以下の作曲家である。()内は演奏ののべ回数を示す。

Bach, Johann Sebastian	(11)
Boulez, Pierre	(23)
Brown, Earl	(42)
Bussotti, Sylvano	(17)
Cage, John	(287)
Cowell, Henry	(19)
Feldman, Morton	(79)
Ichiyanagi Toshi	(57)
Kagel, Mauricio	(22)
Maxfield, Richard	(10)
Messiaen, Olivier	(10)
Nilsson, Bo	(27)
Oliveros, Pauline	(13)
Pousseur, Henri	(19)
Schoenberg, Arnold	(11)
Stockhausen, Karlheinz	(139)
Webern, Anton	(11)
Wolff, Christian	(96)
Wolpe, Stefan	(27)

ケージとシュトックハウゼンの存在が重要であることは、この数からもはっきりと裏付けられる。また、「演奏者」としての活動が第 2 期に集中していることも明らかになった。1951～55 年 (のべ 168 曲)、1956～60 年 (のべ 448 曲)、1961～65 年 (のべ 325 曲) の 15 年間は総計のべ 941 曲であるのに対し。1966～75 年の 10 年間はのべ 111 曲 (自作含む) と激減、1976～96 年の 20 年間はのべ 107 曲となっている。

1960 年代後半以降のチューダーについて一般的にあまり言及されないのは、あまりにも「ピアニスト」チューダーのイメージが鮮烈であるためであろうし、また、多くのチューダーの「作品」が協同作業によるものであり、かつ、ハプニング的で固定化・再演しにくい性質をもっていることが関係していると思われる。しかし、協同という制作のあり方は、第 2 期のピアニストとしての活動においても、きわめて重要な要因である。チューダー研究において、ピアノからの撤退はいわ

ば大きな一つの謎であり、断絶のようにとらえられることが多いが、この「コラボレーション」という軸を立てることによって、演奏家から作家へのプロセスを連続的に考察することが可能になると考える。

(3) チューダーの書簡

チューダー研究の遅れの一因として、彼自身の著述が極端に少ないという点が挙げられる。その点で、チューダー自身の生の言葉に触れることのできる書簡は、きわめて重要な意味をもつ。今回の調査で確認できたチューダーの書簡および書簡草稿は 138 点であった。そのうちの 84 点は、Mary Caroline Richards Papers に含まれるものである。また、David Tudor Papers にも、草稿または写しと思われるものが 28 点、そして、Misch & Bandur 編のシュトックハウゼン資料集にも 13 点の書簡が収録されている。これらのうち、チューダーの人物像や音楽観を理解する手がかりとして役立つと思われる 42 点の抄訳を(澁谷 2012) に公表した。書簡という資料の性格上、演奏旅行中の出来事や食事などについての記述、滞在先やスケジュールの確認等が多くを占めるが、そこからは、音楽家として、また一人の人間としての、チューダーの志向をうかがい知ることができる。以下に、書簡のなかで言及されている主なトピックを挙げる。

- ・1940 年代のオルガンからピアノへの移行
- ・シュトックハウゼンの《ピアノ曲 VI》《ピアノ曲 XI》の演奏
- ・ダルムシュタットにおけるセミナー等の企画、講習会の様子、1957 年のダルムシュタット参加キャンセル
- ・1957 年のバラケ作品の演奏断念
- ・1960 年前後のフルクサス的な作品への関心
- ・シュタイナー思想への関心、1959 年と 1960 年のドルナッハ訪問

いずれも詳細な報告ではないので、これらのコメントのみから確固とした考察を提示することはできないが、チューダー読解のための次のような切り口をここから導きだすことができる。

- ・演奏におけるコントラストや変化の重視
- ・固定化したレパートリーの忌避
- ・作曲家と対等な、作品解釈の主体としての自意識
- ・音楽における時間の重要性
- ・人間の魂や神秘思想への関心

前述のように、今後、収集した資料の解読・分析の作業をさらにすすめ、こうした観

点からのチューダー論を公表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 澁谷政子、デイヴィッド・チューダー書簡抄—1940年代から1960年代初期まで—、福井大学教育地域科学部紀要、査読無、第2号、2012、331-373
福井大学学術機関リポジトリ
<http://repo.flib.u-fukui.ac.jp/dspace/handle/10098/4987>
- ② 澁谷政子、プログラムからみるデイヴィッド・チューダーの音楽活動、福井大学教育地域科学部紀要 第VI部 芸術・体育学 (音楽編)、査読無、第39号、2009、1-15
福井大学学術機関リポジトリ
<http://repo.flib.u-fukui.ac.jp/dspace/handle/10098/2422>

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

澁谷 政子 (SHIBUYA MASAKO)
福井大学・教育地域科学部・准教授
研究者番号：90262253

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし